

平成 16 年 11 月 10 日

<4953 佐々木 朗>

ゆうあい幼稚園の見学（統合保育）

1. 日時 平成 16 年 11 月 10 日(水) 午前 9 時～10 時 30 分
2. 場所 学校法人ゆうあい学園 「ゆうあい幼稚園」
上磯郡上磯町七重浜 3 丁目 12 番 5 号
3. 見学者 奥野 正義先生、三浦さん(幼児教育学生)、佐々木 朗(大学院生)
4. 見学内容 園長先生よりの説明、施設見学
5. 内容のまとめ

登園の様子

大野新道を追分から上磯方向に走り、七重浜交差点の手前を左側に入ってすぐのところにゆうあい幼稚園があった。すぐそばに幹線道路が走り、騒々しい雰囲気があると思いきや、道路を入ると、打って変わっての閑静な住宅街、そこに幼稚園があった。



8 時 40 分頃にバスで第 1 便が到着した。函館バスをチャーターしているようだ。運転手もベレー帽をかぶった女性運転手であり、細かい気配りが感じられる。「おはよう」という挨拶と共に、園児達が園へと姿を消していく。

その後は、地元の園児と思われる子ども達が、母親に、また父親に手を引かれ、あるいは車で、次々と登園してくる。私は園のそばで、その様子を見ていたが、

「おはようございます。」と声をかけると、ほとんどの園児から、挨拶が返ってきた。愛圧はよく心と心の架け橋と言われるが、気持ちいいものである。私は大学にいる時も、特に午前中は



どの学生さん、先生方にも「おはようございます。」と声をかけ、ほとんど挨拶が返ってくる。本学もまた、気持ちのよい場所である。

奥野先生達が到着するまで（本当は大学で待ち合わせで出発のようであったが、私の勘違いで、8 時半前から幼稚園前で待っていたのである。）待っていると、園長先生が、「どうぞ中へ」と案内していただいた。「どうぞ中をご自由に」ということだったので、ご自由にとばかり、教室や外で子ども達と話をした。

「あんた誰？」という顔をしている子どももいたが、「ささき先生です。いつもは小学校の先生ですが、今日は幼稚園を見に来ました。」と紹介すると、仲間に入れてもらえました。一緒におりがみをしたり、ねんどでドーナッツを作ったり、外で砂のダムを作ったりと一緒に過ごした。自由な雰囲気の中で、子ども達同士助け合いながら遊ぶ様子を感じることができた。

斉藤園長先生の話

3人のメンバーがそろって、園長先生に、園長室で施設の概要の話をついた。

まず、この幼稚園の特徴として、今回の訪問の目的でもある障がいのある子どもを受け入れているということである。いわゆる治療保育である。入園に関しては、親と十分、面接をしながら、お互いの理解の上で、入園の可否を判断なされているということである。

現在6クラスあり、障がいのある園児のいるクラスには、複数の教諭で担当をしており、一緒に活動する場面、個別に活動する場面を作っている。

今年は12名の障がいのある園児が入園しており、来年度は8名入園の予定とのことである。

園児と保護者の連携にも気を配り、個人懇談にも力をいれている。中でも障がいのある園児の家庭とは、ゆっくり時間をかけて、子どもの様子や園の指導の方針を伝えると共に、親からの話に耳を傾けるようにしている。

また、未就園児とその保護者を対象にした「ほっぺちゃんクラブ」も実施している。たまたま今日がその日であった。ゆうあい幼稚園は3歳児から5歳児までを対象としており、これから入る3歳未満児にとっては、集団生活を知る大きな経験の場ともなるわけである。

もう一つ大きな特徴と思ったのは、縦割りで教室を編成しているということである。4歳児は全て2階、そして3歳児と5歳児は、1階の3クラスで一緒に生活している。折り紙やコマづくりを年長の子が教えながら遊んでいた。

園内を回って

園長先生の話をついた後、それではどのように実施治療保育が行われているのだろうと思いながら、園内を案内していただいた。



回りながら園長先生から、障がいのある子どもを教えてもらった。見た感じでは、すっかり仲間に溶け込んでいる感じで、三浦さんと「どの子だかよくわかんないね。」などと話していた。右写真のように、個別で指導するスペースもあり、このように教室の一角にある場合もあるし、もの入れのスペースを改造したところもあった。限られたスペースを苦労しながら、指導する場所を確保する配慮を感じた。

その後は、「どうぞ自由に」ということであつたので、私はあちらこちらの教室を回り、園児達と触れ合った。

最初の教室は、折り紙をやっていた。今日は「ネコ」がテーマで、ネコを折っては、体を作っていた。「今度小学校？」って聞くと、「浜分小学校」という声が多かった。地元の子が多いようだ。ねこやいぬ、そしてウサギの話まで、子ども達と話を楽しんだ。うしろにいるグループはブロックで、コマをつくって回していた。私が「一、二のさーん」というと、一緒に力いっぱい回した。

隣のクラスは絵を描いていた。水彩を使っている。自分の感性で大きな木や家を描いていた。書き終わった作品は、自分で乾燥棚においてきていた。障がいのある園児も絵を描いていたが、画用紙いっぱい色をつけのびのびと書いていた。

今日の午前中の遊戯室は「ほっぺちゃんのへや。」子ども達の赤い、やわらかいほっぺ、

どなたが考えたのか、あつたかくてやわらないネーミングだと思う。

今日のほっぺちゃん達が来る時間になると受付に子ども達が数人並んでいる。「何をしてるのかな。」と思うと、受付をしているのである。名簿に をつけてもらい、名札を渡している。その様子を見てみると、「私、おねえちゃんなの。」「ぼく、お兄ちゃんだよ。」という雰囲気



気がとても良く伝わってきた。

ほっぺちゃんクラブは、今日は2名の先生が担当し(その先生の教室は今日は一人でがんばって担当)、ピアノに合わせて、おどったり、歌ったりしている。このほっぺちゃんが一番良かったと思うのが、母親が、そして子ども達が笑顔で、とっても楽しそうに歌ったり、踊ったりしていることである。親子が笑顔で向きあう、とってもすばらしい時間と空間にであった。

2階の4歳児の部屋では、ねんど遊び、紙を切ったの工作、ジュース作りのごっこ遊びをしていた。それぞれが好きところで、自分のやることを一生懸命にやっていた。ポーッとしている子はほとんど見かけなく、小グループで楽しそうに朝の時間を過ごしていた。

続いて外に行ってみた。前庭のコンディションはあまり良くない。中央に大きな水たまりがある。私だったら、「今日は外遊びはなし。」と判断していたかもしれない。ところが子ども達は、お構いなし。水たまりを避けながら、ジャンプして渡ったり、水たまりの水を容器に集めて、砂場に運び、川を作っている。また、他の園児は、水たまりの周りでせっせとお団子を作っていた。着替えはあるそうで、汚すことに必要以上に気を使わず、自由に自然の状態で遊ばせたいという願いを感じた。

鉄棒では、逆上がりの練習をしている子が、何人かいた。コツを教えながら、ちょっと上がりかけた足に手を添えてあげた。クルリと回りかけて、あと一歩で体を起こそうと手や足をふんばっている。「あとちょっと。」声をかけた。やっと顔を上げて、ニコツとしていた。「もう少し、練習するときっとできるようになるよ。」と励ましてあげた。

後始末の時間

後始末の時間の放送が流れると、外の子ども達は、先生方と協力して、遊び道具を片付け始めた。ねんどで遊んでいた子は、小さな粒も落とさないように、ねんどのバケツに片付けていた。

そして、片付け終わったところに自分達で机を運び、椅子を運んで、「広場」から「教室」に変わっていった。

毎日の日課であろう、しっかりと動きが定着していた。椅子の持ち運びも「正しい持ち方わかるかな？」という、違った持ち方をしている子も、持ち換えたので、ほ



めてあげた。「そうだよねえ。それが正しい持ち方だよね。」って。

あっという間の訪問終了

楽しい時間というものの特にあという間に過ぎるようで、幼稚園を引き上げる時間となってしまった。

園長先生の園長保育も考えているという言葉の中に、子ども達が幼稚園を楽しくてしょうがないというのと、働く親達の現状を垣間見た感じがした。

帰る時になって気がついたのであるが、玄関には、全職員の顔写真が花の

形になって貼り張り出されていた。この職員紹介もそうであるが、職員全体で園児を見ているという雰囲気がとてもよく伝わってきた。



5. 感想

私は昨年一年間、6年生に在籍する特殊学級の児童を受け持っていた。そして、国語と社会(といっても国語、社会だけではなく、生活訓練なども含めて)は個別で私が教え、その他の教科では親学級の6年生と一緒に私がそばで支援をしながら学習活動に取り組んできた。知的障害であったが、算数の計算は非常に速かった。友達にちょっかいを出したり、その結果、たたかれ返したり、いじわるをして、倍返しをされたりと、集団の中で鍛えられた所というのは数限りなくたくさんあった。修学旅行でも、少しの距離をおいてついてはいたが、集団行動の訓練はできていたため、協調した行動をとることができた。

このような私自身の経験もあり、健常な子どもと障がいを持つ子どもが、同一の空間で過ごすことはとても意義があると感じている。今回の幼稚園訪問でも、子どもの社会性を育てるということでは非常にいい環境であると感じた。今日の短い時間では、障がいのある子と健常な子がどのように助け合っているのか、細かいところまでは観察することができなかった。しかし、障がいのある子も、みんなと一緒にのことをやろうとしていたし、現に仲間に溶け込んでやっていた。周りの子も何の違和感もなく、そこに一緒に遊ぶ姿が目につかんだ。

勉強の中では、特別なカリキュラムもあるので、その子が別室に行くこともあるだろうし、ふだんの行動も遅れなどがあるだろうから、子どもにとっては、当然「あの子は、ちょっと違う。」とか「あの子だけ、ずるい。」という考えも生まれてくるのである。それもまた当然の感情であろう。このような意味で、健常な子にとっても、3歳から5歳の頭で、「いろんな人がいて、かばい合って、助け合っていくことも大切なんだな。」ということを経験する機会にもなるであろう。

今、時代は「ノーマライゼーション」という言葉がしだいに定着し、また教育においても、特別支援教育の考えが進みつつある。「障がいを持つ」ということで、社会から区別されるのではなく、同じ社会の中で、どう協働していけるか、またそのためにどのような支援をしていくとその子達が伸びていくのかを、考える時代になってきた。

その一方で、障がいを持つ人々にとっては、まだまだ社会全体で受け入れていくという雰囲気までにはまだその距離は遠く、そして障がいのある子どもを持つ親としても、苦勞の連続である。園長先生もおっしゃっていたが、親は子どもの自立に対して、真剣に取り組んでいる。子ども達は日々の生活を通して、また、親達、社会の人達は、「かわいそうに。」「気の毒に」という他人ごとから一步脱却して、障がいのあるなしに関わらず、社会の中で、だれもが自分の存在というものに旨を張って生きていけるような雰囲気づくりに務めていく必要性を感じた。

6．最後に

短い時間の幼稚園訪問であったが、園長先生はじめ、スタッフの動きの良さは、見ていてすばらしかった。職員集団の連携の良さは、組織の運営上の何よりも強みである。そして、先生方全体で全部の子どもに声をかけているのを感じた。先生方の笑顔、子どもの笑顔、そして真剣に遊んでいる姿。充実した見学であった。